

東京湾とのつながりと谷津干潟の魅力

Yatsu-higata Tidal Flat, its charm and the connection with Tokyo Bay

芝原 達也 (習志野市谷津干潟自然観察センター)

Tatsuya SHIBAHARA (Yatsu-higata Nature Observation Center)

shibahara@wildlife.ne.jp

千葉県習志野市にある谷津干潟は、空から見ると窓のように四角い形で、延長約1キロの2本の水路で東京湾とつながり、潮汐を保っている。周囲は埋立地であり、都市の一角に残された干潟はかろうじて生き延びた存在のようであるが、その水辺と空の広がりには“都会のオアシス”として、多くの命を支え、都会で暮らす人々に安らぎの場を与えている。

谷津干潟を含む谷津海岸は、人々の想いや時代を反映し、その姿を変遷させてきた。上野と成田を結ぶ京成本線を運営する京成電鉄は、塩田跡の谷津海岸を買収して1925年に谷津遊園を開設し、最盛期の1950年代には潮干狩りと海水浴のために1日に約5万人が訪れた。

園内は、楽天府(旧日本勧業銀行本店)・阪妻プロダクション撮影所・巨人軍発祥の地・日本発のコークスクリュー・映画「男はつらいよ」ロケ地などに利用された。一方、地元の人々にとって谷津海岸は製塩や採貝、海苔養殖など生業と生活の場であった。その歴史は貝塚から縄文時代まで遡る。1971年に千葉県が「京葉港第二次埋立事業」を開始すると、これに反対する市民運動が始まり、国有地の干潟を除き周囲の干潟は埋め立てられた。運動を続けた人々は残された干潟を“谷津干潟”と名づけて保存を訴え、1988年に国の鳥獣保護区に指定され、1993年にラムサール条約登録湿地となった。

谷津干潟は、満潮になると水路を伝い東京湾の水が入ってくる。水の色は、季節やその時々によって変化し、赤潮のときは潮の香りが増す。潮に乗って入るボラやアカエイがよく見られ、春はカレイの幼魚、秋は大型のスズキが見られる。春から夏の干潮時の干潟では、プツプツとゴカイの巣穴から泡が弾ける音が聞こえ、広がる泥や砂の上を様々なカニが活発に蠢く。これらの生物を採食するため、北極圏と東南アジア、オーストラリアの間を渡るシギやチドリの仲間が干潟に飛来する。鳥も含め、底生動物や魚、プランクトンが東京湾とのつながりによって存在している。希少な魚や底生動物では、トビハゼやニホンウナギ、巻貝のウミニナなどもいる。谷津干潟に出入りする水や、鳥も含めた全ての干潟生物の生態に注目すると東京湾、さらにグローバルなつながりが見えてくる。このように、自然の広がりや奥深さを感じることができるのが谷津干潟の魅力である。

一方、谷津干潟に飛来するシギやチドリの減少、大量発生するアオサの腐敗臭、ホンビノスなど貝殻の水路内の堆積による水交換の阻害、東京湾からの青潮の流入などの問題がある。問題があれば目を背けたくなるのも人情だが、大切に思うからこそ解決に向けて皆で一緒に考え行動するのも人の性である。CEPAの拠点である谷津干潟自然観察センターには谷津干潟に関心を寄せ保全とワイズユースの実践する人々の輪がある。これもまた谷津干潟の魅力である。

東京湾の自然文化遺産およびラムサール条約登録湿地として、谷津干潟の保全とワイズユースをどのように進め、その魅力を向上、発展していくか未来に向けて考えていきたい。

キーワード：東京湾、湿地の魅力、保全、ワイズユース